

Look into the future

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9450

未来を思いやる

Look into the future

金沢大学医学部小児科学教室

小 泉 晶 一

新千年紀(ミレニアム)に立ち会えることは、何となく身の引きしめる感じを持つ。私はこういう事も多少趣味としているので最初に書きますが、今年是新ミレニアムの最初の年であるばかりでなく、400年に一度の珍しい年である。皆さんは閏年の設定基準を多分ご存じだろう。(1)4年に一度西暦が4で割り切れる年、は皆知っている。ただし、(2)100で割り切れる年は閏年とはせず平年とする、も相当のひとが知っているだろう。では今年2000年はなぜ閏年なのか?実はもう一つただし書きがあるのだ。それは、(3)400で割り切れる年は閏年とする、というものだ。今年西暦2000年はこの400年に一度の例外中の例外にあたる閏年なのである。これにより、1582年に、時のローマ法王グレゴリオ13世が制定したグレゴリオ歴は、年平均日数365.2425日となり、実際の年平均日数365.2422日との差はわずかで、3000年に1日のずれしか生じない。天文学は考えるスパンが長く、こんなに先のことまで思いやっている。

比較して、人の一生は100年、しかし人はこの100年の間に自分が存在したことを示す何かを残そうと努力する。私は趣味もあって一時期彗星捜索に凝った。夜空に長い尾を引く彗星(ほうき星)は見た目にもロマンチックだが、これを世界で最初に発見すると自分の名前が付けられるのである。自分の名のついた彗星が永遠に宇宙を回遊するなど考えるとさらにロマンチックではないか。もちろん簡単に発見できるものではなく、数千時間の捜索で1個が平均で、毎夜の地道な努力が欠かせず、私はギブアップした。

話は飛躍するが、一年ほど前に私共の小児科学教室で、世界で初めての全く新しい病気「ヘムオキシゲナーゼ1欠損症」を発見したが(J Clin Invest 103: 129-135, 1999)、なぜこんな大それたことが私共にできたのか?ふと思ったのは、私にあのような趣味とロマンがあったからかもしれない。世界初が彗星ではなく、本職の分野であったことはまことにラッキーであった。ヘムオキシゲナーゼ1はヘムのポルフィリン環を開きビリベルディンに代謝する律即酵素である。いささか手前味噌になるが、この症例を振り返ってみると、2歳頃発症し6歳で残念な

がら亡くなった男の子である。この所見は、(1)著明な溶血性貧血(2)全身性炎症反応(3)凝固・線溶系検査値の異常(4)毛細血管内皮傷害、それに関連は不明だが(5)無脾症などであった。新疾患発見のきっかけはまことに単純で、著明な溶血が存在するのになぜビリルビンが低値なのか?また、なぜハプトグロビンが低下せず逆に異常に高値なのか、ということであって、まったく古典的な生化学の基礎を地道に見直したにすぎない。分解されないヘムが酸化ストレスとなって全身の毛細血管内皮を傷害し、全身性炎症、特に腎障害が惹起されたと考えられる。ヘムからビリベルディンに代謝される際に生じるべきCOと鉄(フェリチン)それにビリルビンが血管内皮に対する酸化ストレス抑制効果を有することから、これらの欠損が致命傷となったのであろう。このようなことから本症の発見を通じ、ヘムオキシゲナーゼ1は小児のみならず、むしろ成人、老人期の血管炎症学や動脈硬化などの分野で注目されてきている。

また話は跳ぶが、近い未来にわれわれの大学でも獨創性をキーワードに改革が迫られている。ただ、昔から日本(人)は獨創性とか個性とかは大の苦手ではなかったか。模倣が上手でも獨創は下手な日本(人)という事実は、日本の風土というか、日本の社会、体質に、その責任の一端があるような気がする。本当の獨創は演繹的な推論からは生れず、飛躍が必須と思う。獨創的発想は“非”連続的である。日本ではこの非連続的で獨創的な感覚は低いと思う。私も一日本人として発想の貧弱性はしかたがないとあきらめ気味だったが、この度の発見はそれに一矢報いることができ、大学人として本当によかったと思っている。ブレイクスルーのために、地道な日頃の努力と、過去のなりゆきやしがらみにこだわらないナチュラル、リベラルな思索を愛していきたい。

「未来を思いやるのが大切なのです。未来を思いやるかぎり退行はありません」と、忘年会で畏敬する先輩が言われた。未来を思いやることとロマンを追うことと同じかどうかわからないが、新ミレニアムに立ち会ってさらに気を引きしめた次第だ。